

平成30年度
第73回北海道教育研究所連盟研究発表大会《函館大会》
兼第60回全国教育研究所連盟北海道地区研究発表大会



期 日 平成30年8月30日(木)・31日(金)
会 場 フォーポイントバイシェラトン函館
主 催 北海道教育研究所連盟
主 管 函館市南北海道教育センター
後 援 全国教育研究所連盟 北海道教育委員会 函館市教育委員会

目 次

I	開催要項	1
II	運営次第	2
III	第16次共同研究経過報告	3
IV	記念講演	6
V	部会研究発表一覧	7
	テーマ A	8
	テーマ B	10
VI	大会役員一覧	12

I 開催要項

1 目的

北海道教育研究所連盟共同研究について研究協議を行うとともに、各加盟機関での教育研究、教員研修等の取組について、交流・協議することにより、北海道教育の一層の充実・発展、並びに所員及び研究員、教職員の資質向上に資する。

2 主催

北海道教育研究所連盟

3 主管

函館市南北海道教育センター

4 後援

全国教育研究所連盟 北海道教育委員会 函館市教育委員会

5 期日

平成30年8月30日（木）、31日（金）

6 会場

フォーポイントバイシェラトン函館

（〒040-0063 函館市若松町14番10号 電話：0138-22-0111）

【第1日】3F：カメラIA

【第2日】3F：カメラIA、カメラII

7 参加対象

北海道教育研究所連盟加盟機関の所員及び研究員、教育関係者等

8 日程

【第1日】8月30日（木）

13:00	13:30	14:00	14:45	15:00	17:00
受付	開会式	全体発表	休憩	記念講演	

【第2日】8月31日（金）

9:00	9:15	10:15	10:30	11:30	11:50	12:00
受付	研究発表 テーマA 研究発表 テーマB	休憩	協議	まとめ	閉会式 ※部会毎	

9 内容

(1) 全体発表

第16次共同研究（2年次）の研究内容

(2) 記念講演

演題 「新学習指導要領の移行期間に、学校、教育研究所・研修センターは何をすべきか～『カリキュラム・マネジメント』、『主体的・対話的で深い学び』の充実に向けて～」

講師 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部

教育課程調査官 渋谷 一 典 氏

(3) 研究発表（部会）

テーマA「カリキュラム・マネジメントの在り方に関する研究」

- ・確かな学力を育てる小中一貫教育や小学校英語教科化に向けてのカリキュラム改善の具体（三笠市教育研究所）
- ・カリキュラム・マネジメントに関する調査～「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指す現状と課題～（胆振教育研究所）

テーマB「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業づくりに関する研究」

- ・「道徳」の時間における児童生徒の道徳性の育成～主体的に考え、議論する展開の工夫を通して～（石狩教育研修センター）
- ・深い学びを実現する学習指導の在り方～各教科における主体的・対話的な学びを通して～（上川教育研修センター）

Ⅱ 運営次第

【第1日 8月30日（木）】

1 開会式 13:30～14:00

(1) 開式の言葉

- | | | |
|-----------|-------------------------------|-----------|
| (2) 主催者挨拶 | 北海道教育研究所連盟委員長
(北海道立教育研究所長) | 北 村 善 春 |
| (3) 祝辞 | 全国教育研究所連盟委員長
(国立教育政策研究所長) | 有 松 育 子 様 |
| | 北海道教育庁渡島教育局長 | 五十嵐 晋 様 |
| | 函館市教育委員会教育長 | 辻 俊 行 様 |

(4) 来賓紹介

(5) 閉式の言葉

2 全体発表 14:00～14:45

第16次共同研究（2年次目）の研究内容

平成30年度共同研究推進委員会委員長 (函館市南北海道教育センター研究員)	山 崎 修
--	-------

3 記念講演 15:00～17:00

演題 「新学習指導要領の移行期間に、学校、教育研究所・研修センターは何をすべきか
～『カリキュラム・マネジメント』『主体的・対話的で深い学び』の充実に向けて～」

講師 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部

教育課程調査官 渋谷 一 典 様

【第2日 8月31日（金）】

1 部会（研究発表） 9:15～10:15

○ テーマA「カリキュラム・マネジメントの在り方に関する研究」

会場：カメラIA

- ・確かな学力を育てる小中一貫教育や小学校英語教科化に向けてのカリキュラム改善の具体（三笠市教育研究所）
- ・カリキュラム・マネジメントに関する調査～「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指す現状と課題～（胆振教育研究所）

○ テーマB「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業づくりに関する研究」

会場：カメラII

- ・「道徳」の時間における児童生徒の道徳性の育成～主体的に考え、議論する展開の工夫を通して～（石狩教育研修センター）
- ・深い学びを実現する学習指導の在り方～各教科における主体的・対話的な学びを通して～（上川教育研修センター）

2 部会（協 議） 10:30～11:30

3 部会（まとめ） 11:30～11:50

4 閉会式 11:50～

Ⅲ 第16次共同研究経過報告

1 研究主題

「これからの時代の教員に求められる資質・能力の向上に係る支援の在り方」

(平成29～31年度)

2 研究のねらい

各教育研究所・研修センターが学校支援のために活用する研修コンテンツ等を収集・提供するとともに、各教育研究所・研修センターが実施する北海道の地域性等に対応した教員研修の充実を図ることにより、これからの時代の教員に求められる資質・能力の向上に資する。

3 研究内容及び推進計画

	研究内容 1 コンテンツによる支援	研究内容 2 ICT の活用による支援 ～ビデオ通話ソフトウェアによる遠隔研修～
1 年次 (平成29年度)	○ 学校の実態に応じた研修コンテンツの作成 ・ミニ道研の資料等を基にした活用しやすい研修コンテンツの作成 ○ 校内研修に活用できる映像資料の作成 ・所員による映像資料の作成 ○ メンター研修等の実践事例の収集 ・若手教員の育成を目指した短時間で行う研修実践の事例の収集	○ ビデオ通話ソフトウェアの活用の試行 ・所員によるビデオ通話ソフトウェアの活用方法の検討
2 年次 (平成30年度)	○ 研修コンテンツを活用した研修の実施、事例の収集 ・校内研修「道徳科の授業づくり」のミニ研修コンテンツの活用・改善 ○ 校内研修に活用できる映像資料等の活用促進、活用事例の収集 ・「道徳科の授業づくり」に関わる研修コンテンツのプレゼンテーション映像の作成 ・校内研修「道徳科の授業づくり」のミニ研修コンテンツに関わる板書画像等の収集 ○ メンター研修等の実践事例の収集 ・「メンター研修」を中心とした若手教員の育成を目指す短時間で行う校内研修事例の改善または作成	○ ビデオ通話ソフトウェアを活用した研修の試行
3 年次 (平成31年度)	○ 研修コンテンツを活用した研修の実施、事例の収集 ○ 研修コンテンツを活用した研修事例の普及・還元 ○ 校内研修に活用できる映像資料等の活用事例の普及・還元 ○ メンター研修等の実践事例の普及・還元	○ ビデオ通話ソフトウェアを活用した研修事例の普及・還元
1 年次～3 年次 (共通)	○ 夏季所員研修会における所員の力量向上及び域内の学校におけるワークショップ型研修のファシリテーション（支援）の在り方 ○ Web 上で提供する内容の共同研究推進委員会における情報共有 ○ 研究発表大会における研究発表及び協議	

4 共同研究2年次（平成30年度）の取組

(1) 研究内容1（コンテンツによる支援）

- ・校内研修に活用できるミニ研修コンテンツ「道徳科の授業づくり」の活用・改善
- ・校内研修に活用できるスライド画面等のプレゼンテーションの作成、ミニ研修コンテンツに関わる板書画像等の収集
- ・若手教員の育成を目指す「メンター研修」等において、短時間で行う校内研修計画の作成または改善
- ・コンテンツ及びその活用事例については、第16次共同研究2年次の成果として、W e b 等で発信を予定

(2) 研究内容2（I C Tの活用による支援）

- ・事務局で準備したW i - F i ルーター等の活用を希望する教育研究所・研修センターに貸し出し、ビデオ通話ソフトウェアを活用した研修等を実施
- ・ビデオ通話ソフトウェア（S k y p e）等を活用した研修の事例の普及や研修報告書について共同研究推進委員会で協議
- ・ビデオ通話ソフトウェア（S k y p e）等を活用した研修の事例を、第16次共同研究2年次の成果として、研修報告書に取りまとめ、W e b 等で発信を予定

(3) 夏季所員研修会の実施

- ・教育研究所・研修センターの所員等のニーズを把握した上で、今日的な教育課題（「いじめ・不登校への対応」「外国語活動・外国語」「道徳教育の充実」「特別支援教育」）の講義・演習を実施
- ・独立行政法人教職員支援機構が作成した「研修の企画・運営・評価」の研修動画を活用した講義・演習を行い、映像コンテンツを利用した研修の在り方について整理
- ・ビデオ通話ソフトウェアを活用した模擬研修を体験することを通して、教育研究所・研修センターにおけるI C Tの活用の可能性を交流

【成果（参加者アンケートから）】

- ・研修講座の企画・運営について多くのヒントを得ることができた。
- ・ビデオ通話ソフトウェア等を用いて遠隔地を結ぶことで、移動の時間が短縮でき、話し合いたいことに時間をかけられると感じた。

【課題（参加者アンケートから）】

- ・教育研究所・研修センターが多様化するニーズにどのように対応し研修講座等を設定しているか、共有する必要がある。
- ・ビデオ通話ソフトウェア等のI C Tを活用した研修の活用場面や活用方法の実例を普及・啓発し、利活用を促す必要がある。

◇ 教職員研修機構の研修動画を視聴した後の協議



◇ ビデオ通話ソフトウェアを活用した研修



- ・外部講師による研修「ワークショップファシリテーションの組み立て方と実践」を研修講座や各種会議等を円滑に進める手法について理解を深めることをねらいとして実施
- ・演習では、会議を進行するための司会、記録係、タイムキーパーを決め、それぞれの会議のゴールや方法について打ち合わせた後、模擬会議を実施

【参加者アンケートから】

- ・会議等を円滑に進めるために、ファシリテーションを取り入れた研修を実施して、管内に還元していきたい。
- ・外部の実践家からレクチャーを受けることができ大変参考になった。自身の実践を振り返り、学び直したい。授業や職員会議、研修など、あらゆる場面で活用できると感じた。
- ・会議の進行は授業同様、事前の計画や「めあて」「まとめ」が大切であることが分かった。



進行担当者の事前打合せ



模擬会議の実施



模擬会議の気づきを共有

(4) W e b ページによる情報提供

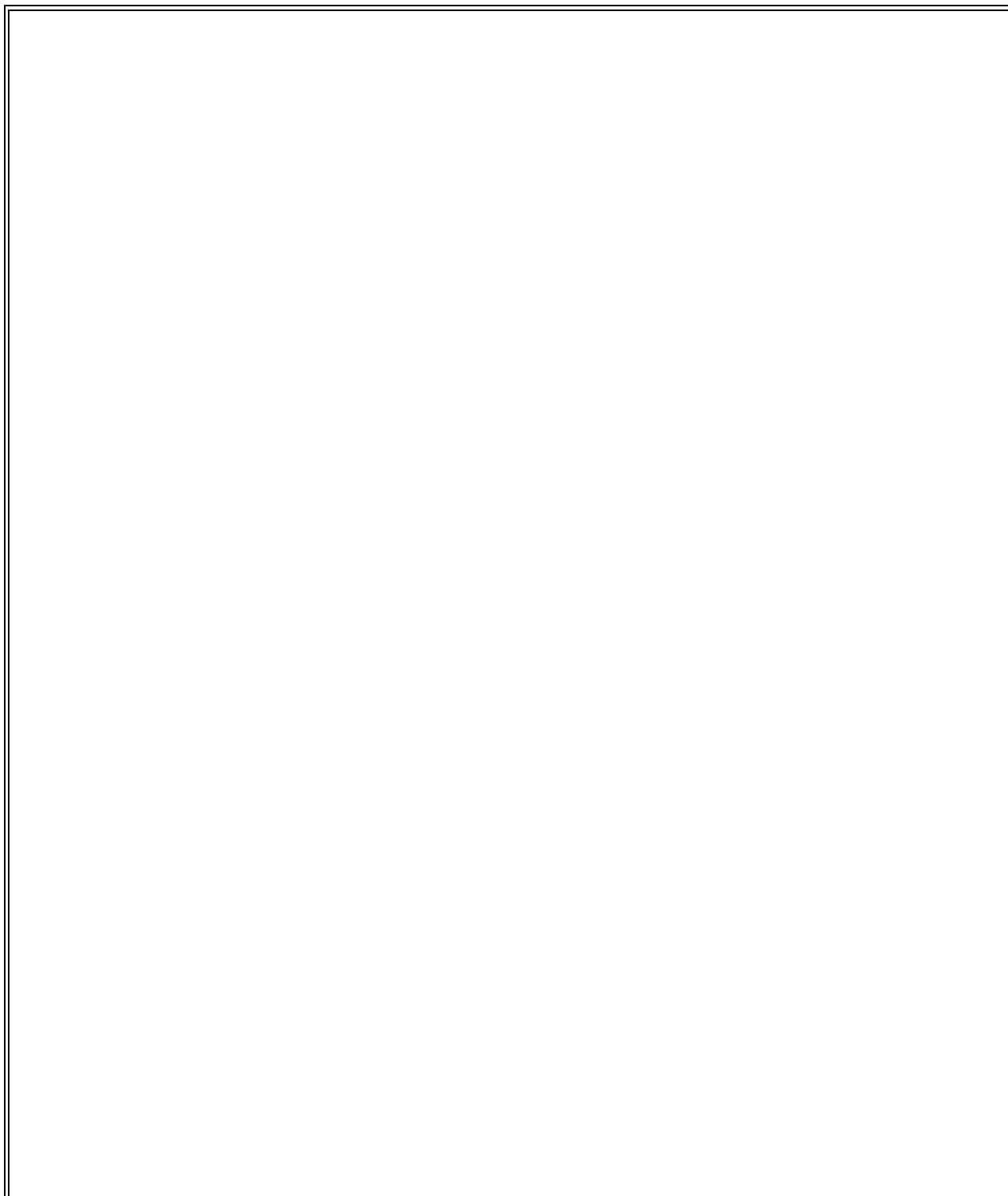
- ・共同研究推進委員会における情報を共有するため、共同研究推進委員会で作成したミニ研修コンテンツ、管内の学校における若手教員の育成を目指したメンター研修等の事例などを道研連W e b ページに掲載
- ・今後、これらの資料を活用した実践事例を収集し、学校で活用しやすい研修コンテンツとして改善し、道研連W e b ページに掲載する予定

Ⅳ 記念講演

「新学習指導要領の移行期間に、学校、教育研究所・研修センターは何をすべきか～『カリキュラム・マネジメント』、『主体的・対話的で深い学び』の充実に向けて～」

講師 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部

教育課程調査官 渋谷 一典 氏



V 部会研究発表一覧

1 日程

9:00	9:15	10:15	10:30	11:30	11:50	12:00
受付	研究発表 テーマA	休憩	協議	まとめ	閉会式 ※部会毎	
	研究発表 テーマB		協議	まとめ		

2 テーマA

会場：3階カメラI

「カリキュラム・マネジメントの在り方に関する研究」

時 間	発 表 内 容	発表機関・発表者	頁
9:25～9:45	○ 確かな学力を育てる小中一貫教育や小学校英語教科化に向けてのカリキュラム改善の具体	三笠市教育研究所 ・松 井 牧 子 ・玉 田 恵	8
9:45～10:05	○ カリキュラム・マネジメントに関する調査～「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指す現状と課題～	胆振教育研究所 ・高 橋 賢 治	9
【司会者】根室教育研究所		主任所員 森 光 司	
【記録者】函館市南北海道教育センター		研 究 員 道 幸 篤 史	
10:30～11:30	協 議		
11:30～11:50	ま と め	北海道立教育研究所部長 中 澤 美 明	
【運営者】北海道立教育研究所		研究研修主事 山 寺 潤	

3 テーマB

会場：3階カメラII

「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業づくりに関する研究」

時 間	発 表 内 容	発表機関・発表者	頁
9:25～9:45	○ 「道徳」の時間における児童生徒の道徳性の育成～主体的に考え、議論する展開の工夫を通して～	石狩教育研修センター ・庄 子 京 平	10
9:45～10:05	○ 深い学びを実現する学習指導の在り方～各教科における主体的・対話的な学びを通して～	上川教育研修センター ・望 月 俊 綱 ・田 村 仁 ・吉 野 和 気 ・斎 藤 邦 彦	11
【司会者】十勝教育研究所		所 員 角 田 裕 司	
【記録者】函館市南北海道教育センター		研究員 橋 田 大 輔	
10:30～11:30	協 議		
11:30～11:50	ま と め	北海道立教育研究所研究主幹 田 中 孝 二	
【運営者】北海道立教育研究所		主査 竹 見 純	

研 究 テ ー マ	
確かな学力を育てる小中一貫教育や小学校英語教科化に向けてのカリキュラム改善の具体	
研 究 の 内 容	
1 研究テーマの趣旨 三笠市では、平成17年度教育特区として「岡山・萱野小中一貫教育」平成23年には「三笠小・中一貫教育」が加わり全市で小中一貫教育を展開している。三笠市教育研究所では、試行の段階から、「国際科」として小学校1年生からの英語教育、「地域科」として小学校3年生から中学校3年生までの地域学習の教育内容基本形の編集に当たってきた。当初は新教科として手探りの状態であり、研究所の作成したカリキュラムを参考に各校での実践検証が進められ、今日に至っている。 昨年度は、新学習指導要領移行期へ向けて、小学校での教科英語の情報収集と国際科カリキュラムの見直しを中心に、「確かな学力を育てる小中一貫教育」の研究をテーマとして取り組み、本年度は小学校3、4年生での外国語活動のカリキュラムを作成している。小学校1年生から「国際科」として取り組み、学習の系統性を踏まえつつ、今日までの積み上げを大切にしながら、本市としての効果的な学習を模索しながら研究を進めている。 また、「地域科」においては、平成28年度に三笠ジオパークESD推進協議会が設置され、その委員として研究所も加わり、地域環境、歴史を学び郷土愛を育むねらいに沿って、各教科との関係を整理した「地域科カレンダー」を作成後各校に配布し、カリキュラム・マネジメントの3つの側面の意識化へ向けて資料提供している。 2 研究の概要 (1) 小学校英語教科化に向けての先行実施校の情報収集と国際科カリキュラムの整理 ア 新学習指導要領の研究と情報収集 イ 「国際科」と「小学校外国語活動3年生・4年生」カリキュラムの整理 (2) 三笠キャリア教育の検討 (3) 地域科学習の充実に向けた資料整理～閉校した小中学校含～	
研究紀要 第130号 新学習指導要領移行期 小学校英語 三笠市「国際科」年間指導計画  三笠市教育研究所	
成果と課題、今後に向けて	
〔成果〕 ○ 昨年度、小学校英語として国際科の見直しを進めたことで、移行期の指導内容を充実させながら、全面実施へ向けての準備を進めることができた。 ○ 本年度は、小学校3、4年生外国語活動の指導内容を整理しながら、小学校1年生からの系統的な学習の在り方について研究推進する方向性が明示できた。 〔課題〕 ● 小学校英語カリキュラムの充実へ向けて、これまでの国際科との融合、発展に向け検討する必要がある。先行実施してきた経緯を活かしつつ示された教育内容の実施へ向け検討することが重要である。 ● 地域科カレンダーの活用と指導工夫についての実践交流で学習深化を図る必要がある。	

(担当 松井 牧子)

研 究 テ ー マ	
カリキュラム・マネジメントに関する調査 ～「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指す現状と課題～	
研 究 の 内 容	
1 研究テーマの趣旨 小学校では平成32年度から、中学校では平成33年度から、新学習指導要領の全面実施に当たり、各学校で新しい教育課程を編成していくこととなる。論点整理では『社会に開かれた教育課程』の実現に向けて」の中で、目指すべき目標を社会と共有・連携しながら教育課程を実施していくこと、また、新学習指導要領では新しい時代に必要となる「子供たちが身に付けるべき資質・能力」が明記された。これらのことを踏まえながら、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るための「カリキュラム・マネジメント」を確立させることが、改訂のポイントの1つになっている。 そこで、胆振教育研究所では、各校の「カリキュラム・マネジメント」の実現に寄与することを目的に、管内小・中学校（苫小牧市、室蘭市を除く）での今までの教育課程の編成について、「カリキュラム・マネジメント」の3つの側面である「カリキュラム・デザイン」、「PDC Aサイクル」、「内外リソースの活用」を切り口としてアンケートを実施し、その結果を分析、考察することで現状と課題を明らかにした。 2 研究の概要 (1) 調査の概要 ア 回答者 胆振管内（苫小牧市、室蘭市を除く）の小・中学校の学校長・教頭・主幹教諭・教務主任のいずれか。管内小学校39校、中学校21校、計60校から回答を得た。 イ 回答方法 回答用紙に選択肢から当てはまるものを選び、番号で回答。記述式の設問については、回答欄に書き込んでもらった。調査結果は、紀要として配布。 (2) アンケートを通して見えてきたこと ア 校長を中心に、各校務分掌が分担してカリキュラムを編成している。 イ カリキュラムの評価・改善に当たっては、校長・教頭が関わりながら、各校務分掌が中心となっていて行っている。 ウ カリキュラムの評価・改善を、年に2～3回行っている学校が多い。 エ 共通理解、体制づくり、個々のマネジメント力向上とそのための研修が必要である。 オ PDC Aサイクル確立のための評価・改善を検討する時間が不足している。 カ 各教科等横断的な視点を持ち、小・中の系統立てたカリキュラムをつくる必要がある。	
成果と課題、今後に向けて	
〔成果〕 ○ 各学校の現状を把握することにより、情報の共有、課題解決のヒントを提供することができた。 〔課題〕 ● 「カリキュラム・マネジメント」の実現に向けての具体的な方策を提供することも必要である。 〔今後に向けて〕 ・今回の調査で把握することができた「カリキュラム・マネジメント」の実現に向けての課題に対応した講座や情報提供の機会を設けていく。	

（担当 高橋 賢治）

研 究 テ ー マ	
「道徳」の時間における児童生徒の道徳性の育成 ～主体的に考え、議論する展開の工夫を通して～	
研 究 の 内 容	
1 研究テーマの趣旨 本研修センターでは、児童生徒の道徳性を育成していくためには、主体的に考え、議論する道徳の授業展開の工夫が求められると考えた。「主体的に考え、議論する」授業づくりをどのように進めればよいのか、理論研究並びに授業実践を通して検討するとともに、その成果を管内に発信することで、管内各校の道徳教育の推進に寄与すると考えた。 ※平成28、29年度の2年継続研究	
2 研究の概要 (1) 「考え、議論する」授業展開の工夫 ア 中心発問・補助発問 (ア) 中心発問…資料を基に、葛藤を生み出しながら、本時のねらいとする価値を追究させる重要な発問（多様な考えを引き出すことが必要） (イ) 補助発問…中心発問を補うための発問→問い返し、揺さぶり等 イ 議論を活性化させるための手立て (ア) 話し合いの形態の工夫（ペア・グループ・フリー・同じ考え同士・全体 等） (イ) 思考ツール・話し合いのツールの活用（ネームカード・心情グラフ・心情直線・選択肢カード 等） (2) 評価の在り方 ア 評価の手立て (ア) 「道徳振り返りシート」からの見取り (イ) 授業中から見取り イ 評価方法 (ア) パフォーマンス評価 (イ) エピソード評価 ウ 評価の記録化（蓄積） エ 大きくくりな評価…学期や年間など一定の期間の中で継続的に見取ったことを基に評価	
成果と課題、今後に向けて	
〔成果〕 ○ 異なる立場を引き出すような中心発問を行うことにより、児童生徒の葛藤を生み出し、議論を焦点化させることができた。また、補助発問で児童生徒の考えを揺さぶったり、掘り下げたりすることにより、多面的・多角的に考えさせ、道徳的価値の理解を深めさせることができた。 ○ 話し合いの形態を授業のねらいに即して変化させることで、議論の深まりが見られた。 ○ 思考ツール・話し合いツールを活用することで、他者理解や議論の活性化につながっていた。 ○ 「道徳振り返りシート」へのコメントや授業中に見取ったことのメモを蓄積していくことで「大きくくりな評価」を行うことができた。	
〔課題〕 ● 児童生徒が道徳上の問題を「自分との関わりの中で考える」ことが重要である。そのためには、身近な生活と結び付けたり、「自分ならどうするか」「よりよい方法は何か」を考えさせたりするなど、自分事として捉えられるような教材の生かし方について、今後も検討を進める必要がある。 ● 「道徳振り返りシート」は児童生徒自身が変容を捉えるという点には課題が残った。一定の期間の中で振り返らせたり、自己評価を行わせたりするなどの手立ても必要と考える。	
〔今後に向けて〕 ・道徳教育を進めるに当たっては、道徳教育推進教師を中心に学校全体で道徳教育の在り方について協議し、組織的、計画的に授業づくりや評価に取り組むことが重要である。本研究委員会で発信していた内容を基に、各学校の独自性を生かした道徳教育の展開が期待される。	

（担当 庄子 京平 ・ 草野 智大）

研 究 テ ー マ	
深い学びを実現する学習指導の在り方 ～各教科における主体的・対話的な学びを通して～	
研 究 の 内 容	
1 研究テーマの趣旨 将来を見通すことが困難な時代に入った今、学校教育においては、社会の変化に主体的に対応し課題を解決する資質・能力を児童生徒に育成することが求められている。教育の直接の担い手である教師には、これまで不易とされてきた資質・能力に加え、自律的に学ぶ姿勢をもち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質・能力を生涯にわたって高めていくことのできる力などが必要である。とりわけ、新しい学習指導要領の全面实施を見据え、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善の取組を活性化していくことが求められている。 児童生徒一人一人が「どのように学ぶか」という学びの質は、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり、多様な人との対話で考えを広げたり、各教科等で身に付けた資質・能力を様々な課題の解決に生かすよう学びを深めたりすることによって高まる。こうした「主体的・対話的で深い学び」が実現するように、日々の授業を改善していくための視点を共有し、学習の在り方そのものの問い直しを目指す。	
2 研究の概要 (1) 目標と手立てが合致した単元の指導計画及び具体的な児童生徒の姿を見取る評価計画の作成 ア 指導計画 ・学習指導要領を基に指導内容を明確化し、目標・課題・まとめ・評価の整合を図る。 ・授業改善の4つの視点を意識し、主体的・対話的な学びを意図的に位置付ける。 イ 評価計画 ・観点別評価及び目的に応じて「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」を位置付ける。 ・目標に達したと判断する具体的な姿を想定し、評価の場面と方法を位置付ける。 (2) 主体的な学びと対話的な学びの視点を重視した学びの質を高める本時の授業展開の工夫 ア 主体的な学び ・問題意識から課題を設定し、課題解決に向けた方法や手順を確認させ、見通しをもたせる。 ・1単位時間の終末の場面で「学びの成果」や「解決の過程」を振り返らせる。 イ 対話的な学び ・互いの考えを共有し合うために、論点を明確にし、板書の構造化を図る。 ・理解を確かなものにするために、学習内容を活用して取り組む場面を設定する。	
成果と課題、今後に向けて	
[成果] ○ 学習指導要領に基づく指導内容を分析し、目標・課題・まとめ・評価の整合を図った単元の指導計画を作成したことで、目標達成に結び付く学習指導案の基本形を提示することができた。 ○ 自己の学習を見直し振り返る主体的な学びと、思考を広げ確かな学びに向かう対話的な学びを重視した本時の授業展開モデルを提示することができた。 [課題] ● 「深い学び」の姿を一層具体化する必要がある。 [今後に向けて] ・単元や題材のまとまりを意識した授業改善を推進するため、研究協議の手法を工夫する。	

(担当 望月 俊綱)

VI 大会役員一覧

大会長	北村善春	北海道教育研究所連盟委員長（北海道立教育研究所長）
副大会長	檜田英樹	北海道教育研究所連盟副委員長（札幌市教育センター所長）
	岩田稔	北海道教育研究所連盟副委員長（空知教育センター所長）

【北海道教育研究所連盟事務局】

事務局長	中澤美明	（北海道立教育研究所企画・研修部長）
事務局次長	田中孝二	（北海道立教育研究所企画・研修部研究主幹）
	鶴田純子	（北海道立教育研究所総務部事業課長）
事務局員	相馬健志	（北海道立教育研究所総務部事業課主査）
	竹見純	（北海道立教育研究所企画・研修部主査）
	高橋裕司	（北海道立教育研究所企画・研修部主査）
	大井結厘子	（北海道立教育研究所企画・研修部主任研究研修主事）
	山寺潤	（北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事）
	森田雅彦	（北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事）
	高木志磨人	（北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事）

【運営委員会】

委員長	寺本公彦	（函館市南北海道教育センター所長）
副委員長	小林郁	（函館市南北海道教育センター指導主事）
事務局長	佐藤大輔	（函館市南北海道教育センター指導主事）
総務部	山崎修	葛西猛 道幸 篤史 中村 円
	横山嘉弘	馬場一徳 高波綾佳 永井朋子
	三浦明子	中里敦 川端祐介 村田恵介
	阿曾優吾	橋田大輔 高野克 長村幸浩
	磯波理恵	高谷亜姫 北村明子 大河原美穂
	川村珠実	高橋晋司（函館市南北海道教育センター研究員）

【平成30年度共同研究推進委員会】

委員長	山崎修	（函館市南北海道教育センター研究員）
副委員長	森田雅彦	（北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事）
委員	小川智宏	（石狩教育研修センター指導員）
	高山幸	（空知教育センター所員）
	角田裕司	（十勝教育研究所所員）
	斎藤邦彦	（上川教育研修センター研究員）
	明石貴宣	（留萌管内教育研究所主任研究員）
	森光司	（根室教育研究所主任所員）
	太田秀藏	（苫小牧市教育研究所指導主事）
	岩渕浩憲	（札幌市教育センター指導主事）
	芳賀均	（北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター員）
	山寺潤	（北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事）

